

## 親たちはなぜ自制が利かなくなったのか

～学校への利己的言動、増加の背景をさぐる～

佛教大学研究員 齋藤 浩

### 抄 録

保護者の学校に対する利己的な言動は増加の一途を辿っている。多くの教師が「保護者の対応が増えた」と指摘し、教育現場は「まず子どもありき」ではなく、「まず保護者ありき」と大きく様変わりしている。

なぜこのような事態になってしまったのか。きちんと背景を探ることが解決の第一歩だと考えるが、多くの先行研究は極端なクレームを列挙することで不安を煽り、適当な原因を無責任に指摘するだけである。

本研究では実際の事例やデータの分析を中心

に検証した結果、「何らかの社会変動のため、保護者の学校や教師に対する信頼感の低下や利己的な言動を特別なものとは思わない風潮を呼び起こすことになった。そして個人でまた親しいグループでいても社会通念から孤立している保護者が真っ先にその影響を受けることになった。」と判明した。

キーワード：モンスターペアレント、利己的言動、クレーム、トンチンカンな要求、社会変動、孤立

### はじめに

近年、学校に対する保護者の利己的な言動が増加していると言われる。教師や学校を追いつめる保護者の総称として、向山洋一氏は彼らをモンスターペアレント<sup>(1)</sup>と命名した。このセンセーショナルな言葉の響きに反応し、多くの研究者が所謂「モンスターペアレント」に関する著書を刊行している。だが、その多くは事の深刻さをおもしろ可笑しく書き立てるだけの、極めて表面的なものである。

例えば、話題作「教室の悪魔」(ポプラ社)で有名な山脇由貴子氏は、「モンスターペアレントの正体」(中央法規)の中で、保護者の突然のクレームを紹介するだけでなく、疲弊する子どもたちの原因として「苦しみしかもたらさない

学校」<sup>(2)</sup>の存在を挙げている。ここまで言い切ることによって保護者や教師の不安を煽り、誰が幸せになるというのであろうか。

「モンスターペアレント!？」(アспект)の著者である諸富祥彦氏は、日本の親が劣化した時期の特定として「松田聖子」を名指ししている。「個人主義的な価値観を持った困った親の先頭を切ったのは、30代から40代半ばの親御さん、いわば松田聖子世代の人たち」<sup>(3)</sup>として、所謂モンスターペアレントの誕生時期を特定しているが、あまりにも稚拙な考えである。藤原智美氏が、公共の場で突然怒り出す高齢者の現象を分析した「暴走老人！」(文藝春秋)を刊行しているが、諸富氏の考えでは、そうした老人達も松田聖子の歌を聴いて育ったことになる。

保護者の利己的な言動が増加した背景として、いくら根拠のないものを挙げられても、将来の解決策につながるとは思えない。

保護者の利己的な言動の増加は、学社融合の実現をも脅かしていることを考えれば、将来何らかの対策を講じなければ両者の溝は広がるばかりである。そこでまず、保護者の利己的な言動の増加の程度や時期をさぐることで、教育現場で何が起きているのかを調査した。さらに、具体的な事例やデータ等を分析することで、利己的な言動が増加した確かな背景を導き出していこうと考えた。背景が分からなければ、的確な対処が出来ないからである。

## 1. 利己的な言動は増加したのか

まず最初に保護者の利己的な言動がどの程度増加したのか、ここ3年のデータを見ることで明らかにしていこう。

最初に大阪大学の小野田正利氏が2005年に実施した「学校現場における保護者対応の現状に関するアンケート」結果を見てみよう。氏は関西地区の幼稚園、小学校、中学校、高校、養護学校の校長、教頭もしくは主任教諭507人を対象に「無理難題要求は果たして増えてきているのか？」と聞いているが、「非常に増えていると思う」と回答したのは、小学校で27%、中学校で26%であった。「少し増えていると思う」という回答も、小学校で62%、中学校で56%であった。増えていると回答したのは、小学校では89%にも達し、中学校でも82%<sup>(4)</sup>という高い数字であった。

東京大学大学院の金子元久氏も2006年に同様のアンケートを取っている。「学力問題に関する全国調査」を全国の公立小中学校10800校を対象に実施したが、その中で「保護者の利己的な要求」の深刻さについて設問している。「きわめて深刻」とする回答が、小学校で25.8%、

中学校で29.4%であり、「やや深刻」とする回答も、小学校で52.0%、中学校で49.7%という高さであった。深刻と回答した割合を合わせると、小学校で77.8%、中学校で79.1%<sup>(5)</sup>にも達していた。

同年、Benesse教育研究開発センターでは、東京大学からの依頼を受け、全国の公立小中学校の教員約5万人を対象に、「教員勤務実態調査」を行っている。「教員の仕事に対する意識」の中で、「保護者や地域住民への対応が増えたかどうか」を聞いているが、「とても感じる」と「わりと感じる」とした回答を合わせると、小学校では74.9%、中学校では70.6%<sup>(6)</sup>というデータが出ている。

教師や学校を対象に、「無理難題」「利己的な要求」「対応」の増加をそれぞれ聞いてものであるが、問いかける言葉の違いで結果に差が出た可能性もある。だが、7割から8割後半の数字で、学校若しくは教師が保護者に対して難しさを感じていることは事実である。

また2007年、日本PTA全国協議会では、小学生の保護者1832人、中学生の保護者2037人を対象に「教育に関する保護者の意識調査」の中で「学校や教育委員会に対して身勝手な要求をする保護者が多いとの声を聞くことがありますか、あなたはどのように感じていますか」というアンケートを実施している。「特にそう感じている」と回答した小学生の保護者は12.0%、中学生の保護者は11.5%であった。また「ややそう感じている」という回答も小学生の保護者で40.8%、中学生の保護者で42.3%であった。「特にそう感じている」と「ややそう感じている」割合を合わせると、小中学生の保護者共に、5割以上の保護者が「そう感じている」<sup>(7)</sup>ということであった。

学校や教師は、要望や要求の受けてであり過敏に感じる部分があるが故に、保護者との関係に難しさを感じる指摘が多くなることはある程

度予想できた。だが、同様の指摘を多くの保護者がしているのは興味深いことである。保護者からの利己的な言動は増加している、またはとても多いと見て良いであろう。

では、いつ頃から利己的な言動が増し、現在のように危機的な状況になってしまったのでしょうか。

## 2. 利己的な言動が増した時期

小野田氏は同アンケートで、「いつ頃から無理難題要求が増え始めたか？」という設問を立てている。「10年ほど前から」という回答が、小学校で50%、中学校で39%、「5年ほど前から」という回答が小学校で22%、中学校で21%であった。「保護者の無理難題要求が増え始めてきたのはほぼ1990年代後半以降ということが出来る」<sup>(8)</sup>と指摘している。

ところで、本当にこの時期から保護者の利己的な言動が増してきたのであろうか。その時期を特定することは、背景を考察する上でも大切な要因となる可能性があるため、他のデータを用いて更に検証していこう。

まず日本教職員組合の調査から、その時期を特定するヒントを得ることが出来る。1975年の「教職員の健康調査結果」(小学校2141人、中学校1342人、高校805人、総計4288人)の中で、教職員の「健康阻害の原因」を聞いているが、保護者との関係を指摘する回答はない<sup>(9)</sup>。1982年にも同調査(小学校3976人、中学校2484人、高校1524人、総計7984人)を実施しているが、その年も保護者との関係を健康阻害の原因に挙げる回答はない<sup>(10)</sup>。「その他」の項目の中に「保護者の利己的な言動」を指摘する声があった可能性も否定できないが、それでも項目として成立していない以上、今から25年前までは保護者が学校や教師に対して利己的な言動を取ることは希有であったと見るべきである。

それが1997年の「教職員の悩み調査」(小学校1217人、中学校727人、高等学校273人、総計2217人)では状況が大きく変わってきている。「子どもたちとの関わりに関する悩み」の中で、「子どもを取り巻く家庭環境、家庭・保護者などの価値観の多様化などによる指導の難しさ」を挙げている回答が、小学校で36.6%、中学校では19.1%<sup>(11)</sup>と、数字上初めて家庭や保護者との関わりでの難しさを表すデータが出てきたのである。1999年の「学級担任調査(小学校編)」(小学校教師1778人)においては、「学級担任をやめたいと思ったことのある」と回答した618人のうち、100人(16.2%)が「保護者との関係がうまくいかない、要望が多い、意見の食い違い、トラブル等」<sup>(12)</sup>と、保護者との関係の難しさを指摘している。

2002年に、同組合は「教職員の生活・勤務・健康実態に関するアンケート調査」(教諭、養護教諭、学校事務職員2160人)を行っている。その中で教諭を対象に「保護者との人間関係」を問う項目があるが、「大変・まあまあ良好」としたのが66.6%、「どちらとも」とこたえたのが30.9%、「あまり・うまくない」が1.6%<sup>(13)</sup>と、両者の関係はまだ危機的状況ではない。

他の機関では、1995年に横浜市教育文化研究所が「教員の生活・勤務実態と社会的活動への参加状況調査」(横浜市内の小、中、盲・ろう・養護学校の教師1766人)を実施した。その中の「あなたは最近、教員をやめたいと思ったことがありますか」という問いに対し、「今も思っている」が9.2%、「時々思うことがある」が39.2%、「前に思ったことがある」が25.4%と、「やめたい」と感じた若しくは感じている割合が73.8%であった。次に「教師をやめたい理由」を聞いたところ、「保護者とのトラブル」を挙げているのは4.9%<sup>(14)</sup>であった。全体の理由の中では第9位という順番である。

茨城大学の小島研究室が2001年に実施した

「教師の社会意識と教育意識に関する全国調査」(全国の小中学校教師2185人)における「教師の悩み」を聞く設問の中で、「父母からの注文」を悩みの原因に挙げる割合は小学校で14.5%、中学校で13.6%<sup>(15)</sup>であった。

こうしたデータを通して言えるのは次のようなことである。第1に、1990年代中頃より、保護者の学校や教師に対する意識の変化が認められることである。第2に、以後徐々にそうした傾向が2000年最初まで続くが、数字としては劇的な変化はまだ認められないということである。第3に、2000年代中頃より、保護者の利己的な言動が飛躍的に増加し、現在まで継続しているということである。小野田氏の調査結果からは1990年代後半以降、保護者の無理難題要求が増え始めたということであった。だが、厳密に言くと、1990年代中頃よりほぼ10年間は緩やかな曲線であったものが、ここ数年で急激に曲線角度を上げたと言わざるを得ない状況である。保護者の利己的な言動が増加した背景としては、自然にそうなっていったのではなく、何らかの社会的変動があったのではないかと考えるのが妥当であろう。

実際の社会的な変動の内容を知る術はなかなかない。だが、保護者自身が、また保護者の学校や教師に対する意識が、どのように変化したのかを明らかにしていけば、自ずと解決の糸口は見えてくるものと考えている。

### 3. 「困った親体験」750事例の分析

#### 3-1. 分析の視点と結果

臨床教育研究所「虹」が発行したレインボーレポートVol. 12「モンスターペアレントの実態とその背景」の中に、「あなたは、どんな困った親体験をしましたか。具体例を挙げてください。」という設問がある。この調査で集まった事例は750である。この事例の分析を工夫することで、

保護者の利己的な言動が増加した背景に迫れないものかと考えた。

調査の対象とした事例は750人から集まったものであるが、まずこの中から意味が不明瞭な内容、对学校や対教師でない内容(例えば親同士のもめ事)、クレームとは言えない正当だと思われる内容の44人分を省き、706人分の事例を調査対象とした。また一人で複数の事例を記述している場合もあり、件数としては884件の事例を分析することとなった。

臨床教育研究所「虹」を主催する尾木直樹氏は、これらの事例から「モンスターペアレントは、わが子中心型、学校依存型、権利主張型、ノーマラル型、ネグレクト型などに類型化できることが明らかになった」<sup>(16)</sup>としているが、本研究では保護者の行動パターンから類型化するという方法は避けた。類型化した結果、例えばわが子中心型が多かったとしても、その背景を特定することは難しいからである。

そこで、本研究では「困った親体験」の分類を、内容からではなく質から行うこととした。ここで言う質とは、困った親からの言動の受け手である学校や教師の対応の仕方の違いであり、次のように大きく3つに分けた。

- (1) 解決のしようがないクレーム
- (2) 常識の範囲を超えるトンチンカンな要求
- (3) クレームや要求を伴わない非常識な言動

(1)のクレームについては、忠井俊明氏の理論をもとに、パーソナリティのタイプから、更にシゾイド型クレーマーとナルシスティック型クレーマー<sup>(17)</sup>の2つに分けた。忠井氏はそれぞれのクレーマーの特質として、次のような点を挙げている。

#### ①シゾイド型クレーマー

彼らが体験した出来事を常に悪意あるものとして感じる傾向を持っている。(実際にはそのような事実がないにもかかわらず)子どもがいじめを受けているという認識は、このような被

害的体験様式から生じる。

### ②ナルシスティック型クレーマー

シゾイド型のように出来事を曲解して認識することは少ない。しかし、「教師の対応の不適切さ」の是非といったような水掛け論に終始するような巧妙な問題にクレームをつけることが多い。おしなべて知的レベルの高い彼らは、弁舌も巧みで執拗である。しかし、彼らの真の目的はクレームの正当性を示すことではなく、他者を打ちのめすことで他者よりも優れている自己を証明することである。

(2)の要求については、学校や教師の仕事の範囲を超えると考えられる常識を外れるものを、特に「トンチンカンな要求」と呼ぶこととした。要求自体は正当な権利ではあるが、学校や教師の仕事の範囲を超えるものは、まさにトンチンカンな内容とも言うべきものであろう。本研究では、更に次の2つに細分化した。

### ③教育とは無関係なトンチンカン型内容

「お金を貸して欲しい」「保険に入って欲しい」「自分の家の戸をたたく人がいるから警察に電話して欲しい」など、学校教育や子どもを育てることに無関係な内容。

### ④根拠も妥当性もないトンチンカン型内容

「内申を上げるように他の先生に頼んで欲しい」「学芸会では脇役だったので、今度は自分の子どもが主役の劇を作りやってほしい」など、要求している内容は学校教育に関係した事ではあるが、自分勝手に根拠や妥当性もない内容。

(3)のクレームや要求を伴わない非常識な言動については、更に次の4つに細分化した。

### ⑤教師への攻撃言動

実際にクレームをつける訳ではないが、「夜中でも平気で教師宅に電話をする」「メールで教師の悪い噂を広める」「教師を脅す言葉を使う」「呼び捨てにする」など、教師を必要以上に見下すだけでなく、その人格を平気で傷つけるような言動。

### ⑥養育義務の放棄・怠慢

子どもを育てることよりも、保護者自身の都合を優先する言動。「給食費の未払い」「子どもを登校させる気がない」「欠席の連絡をしない」など、保護者が子どもを養育する義務を果たさない。

### ⑦養育方法の誤解・曲解

「何でも子どもの言い分を鵜呑みにする」「自分の子どもの非を認めない」「ちょっとの怪我で大騒ぎする」など、過保護・過干渉・偏った教育観に該当する言動。

### ⑧養育と無関係な非常識言動

大人として、また人間としてのマナーに欠けた言動。「授業参観でのおしゃべり」「ガムを食べながら校内を歩く」「運動会での飲酒」など、教育の場にいることに対して無自覚さがもたらすと考えられる。

884件の事例をこの3種類8項目に分けると、下記〈表1〉のようになる。

〈表1:保護者の利己的な言動の分類〉

保護者の利己的な言動のタイプ	件数
【(1) 解決のしようがないクレーム】	274
①シゾイド型クレーマー	30
②ナルシスティック型クレーマー	205
※上記の分類が難しいクレーム	39
【(2) 常識を超えるトンチンカンな要求】	121
③教育とは無関係なトンチンカン型内容	32
④根拠も妥当性もないトンチンカン型内容	89
【(3) クレームや要求を伴わない言動】	516
⑤教師への攻撃言動	188
⑥養育義務の放棄・怠慢	157
⑦養育方法の誤解・曲解	146
⑧養育と無関係な非常識言動	31

(注:1つの事例でも複数の該当する場合があります、884の事例に対して類別の総数が911となっている)

## 3-2. 分析結果の考察

事例の絶対数が少なく、また所謂教師の言い分を頼りにした内容であるため、データとして

の信憑性に欠ける面も多々あると考えられる。また事例の読み取りを曲解し、本人の意図とは違う項目に数として入れている可能性も否定出来ない。ただ、ここで必要なのは正確な数字ではなく、全体的な傾向である。分析の結果から、次の3点の傾向が見られることが分かった。

#### A. ナルシスティック型クレマーの多さ

どちらかの判別がつかない39事例を除いた、235件のクレームのうち、ナルシスティック型クレマーに該当するのは205件、クレーム全体の87%を占めていることになる。これは何を指すのか。

忠井氏は、ナルシスティック型クレマーの特性について、「尊大な態度や自己中心的な感性を持つ他者軽視のパターン」<sup>(18)</sup>と指摘する。更にシゾイド型クレマーと比較して、「劣等性、被害性などといった社会的な負の部分に関連するシゾイド型クレマーに比べ、自己主張性、万能性といった社会的な正の部分に関連する」「遺伝(素質)的要因が強く、時代社会を越えて一定数存在すると考えられるシゾイド型クレマーに比べ、社会的変動を受けやすく、今も増えていると考えられる」「彼らの方が高学歴で弁も立つ傾向にある」<sup>(19)</sup>と説明している。

つまり、クレマーの中でも、ナルシスティック型クレマーが多いということは、教師または学校を軽視する社会風潮が広がったことがまず挙げられる。次に保護者が自己主張することを優先し、その対象となる教師や学校の心情(心の傷)に対して無頓着(無自覚)な様子も見えてくる。なぜなら自分たちこそが万能だと考える傾向があるからである。

#### B. 教育とは無関係なトンチンカン型内容の存在

121件の常識を越えるトンチンカンな要求のうち、32件が教育とは無関係なものである。わが子可愛さのあまり、無理な要求をする保護者の心情はまだ理解することが出来る。だが、26%もの学校教育とは無関係な要求があるとい

うことは、高い数字であると言わざるを得ない。

ここから分かるのは、学校や教師に対して何でも頼んで良いという一部の保護者の姿勢である。「借金」なども平気で頼む事例からも分かるように、学校や教師の存在を軽視する風潮が蔓延してきたとしか思えない。また要求する一部の保護者も、トンチンカンだという自覚が欠如していると言わざるを得ない。

#### C. 教師への攻撃言動の多さの意味

アンケートの回答者の大多数が教師であることから、「困った親体験」の記入欄に自分に対する保護者の攻撃を書くケースが多いことはある程度予想できた。それでも516件中188件と、最も高い数字を示している。傾向としては、教師がかつてのような尊敬の対象ではなく、保護者の様々な不平・不満の矛先になっている様子が見て取れる。

また教師への攻撃言動として挙げられた188件の内容を見ると、悲劇的な傾向が浮かび上がってくる。例えば、「メールで担任に関する勝手な噂を回す」「すぐに教育委員会に担任についての苦情を伝える」「議員を連れてきて不当な申し出をする」などの事例があるが、それはまだ許容出来る範囲である。なぜなら、法律を破る行為とは言えないからである。だが、188件の事例のうち、法律に触れる可能性のあるものが104件もある。「担任を深夜に呼びつける」「毎晩自宅まで電話をかける」「ヤクザのような迫り方をする」「刃物で脅す」などという事例は、非常識だというレベルを越えて、もはや犯罪行為である。教師に対しての攻撃言動の事例のうち、半数以上の55.3%がそれに該当しているのである。

もはや教師に対しての尊敬の念の喪失などという悠長な事を言っている場合ではないほどの危機である。教育界でかつてなかったような数字である。また法律を犯すほどの言動がこれほど多いということに、保護者の常識感覚の麻痺さえ感じる。自分が間違ったことをしている自

覚がないというような簡単な言葉では済まないであろう。そこまでの行為をする保護者に対して、もはや誰も諫めたり咎め立てしたりする様子は見られない。社会常識からだけではなく、社会システムからも孤立していると言えるのではないか。個の孤立、または親しい何人かが集団ごと社会から孤立しているのである。

#### 4. ドラマ「モンスターペアレント」 BBSの分析

平成20年7月1日より同年9月9日まで、関西テレビ制作のドラマ「モンスターペアレント」がテレビ放映された。それに伴って視聴者の声を集めるため、同局は公式BBS（電子掲示板）を開設した。寄せられた件数は、1242件であった。内容の多くは出演した俳優に対する声であったが、それでも保護者や教師・学校に対する意見が多く寄せられていた。

BBSを分析するということに対して問題がない訳ではない。テレビの視聴者を対象にするということは、もともとそのテーマに対する関心が高い人の意見であるため、正確なデータが得られない可能性があるからである。番組の内容を見てから書き込みをするため、制作者の意図を受けすぎていることも考えられる。

それでもBBSの分析には大きな意味があると言える。それはアンケートにこたえてもらう訳ではないので、保護者なり教師に対するストレートな声が集まるからである。正確な数字を把握することが本研究の目的ではない。保護者の利己的な言動が増加した背景が分かれば良いのである。一人で何回かの書き込みをするケースも多少見られたが、ここではおおよその傾向を見ていくことに主眼を置くため、特に問題ともししていない。

#### 4-1. 「教師や学校に向けての声」

BBSの中では教師や学校を対象にした声が多く集まっていた。その中でもドラマの内容に関する意見や俳優の演技に対する感想等を除外し、教師や学校に対する一般論を述べたBBSを対象にした分析をした。視聴者の教師や学校に対する意見は、肯定・否定の極端な二極化が見られた。

〈表2:教師や学校への評価〉※数字は件数

	教師	学校
肯定的な評価	43	2
否定的な評価	74	24

143件のBBSがあったが、予想に反して教師や学校への視聴者の見方は厳しいものであった。ドラマの内容がモンスターペアレントに蹂躪される教師や学校という構図であったため、教師や学校に対する応援が当初は大半を占めると考えていたからである。

最初に、教師に対するBBSを分析していこう。〈表2〉のように117件の声が届いているが、教師に対して否定的な評価をする割合は63.2%である。内容としては、「モンスターティーチャーもいる」「一部、問題行動を起こす教師もいる」「猥褻で捕まる教師が多い」など、教師の行状に対する意見が多いと共に、「親が恐くて毅然としていない」「先生はなめられている」といった弱腰の姿勢を指摘する声が多いのも特徴である。「先生も大変だと思う」「子どものために頑張っている」という肯定的評価もあるが、教師に対する一般の意識は厳しいと言わざるを得ない。これでは、なかなか尊敬の念は持てないであろう。

次に、学校に対するBBSを分析していこう。全26件のうち、92.3%にも及ぶ24件が否定的な評価である。内容としては、「親が恐くて毅然としていない」が9件とトップである。教師・学校共に、その弱腰に対して厳しい意見が集まっている。

#### 4-2. 「19歳以下の視聴者の声」

まだ未成年である子どもの声も分析したいと考えた。親という存在は多分に子ども中心で物事を考えるため、子どももある程度は親の利己的な言動を肯定しているはずだと推測したからである。

ここでは子どものイメージを調査したいと考え、モンスターペアレントという存在に対する一般的な意識だけではなく、ドラマの内容に関する声まで含めて集計した。該当する件数は99件であった。

調査の結果、「教師や学校に対する利己的な要求をする親」に対する否定的な意見は96件、肯定的な意見は1件であった。書き込みを行ったうちの約99%の子どもが、予想に反して身勝手な親に対して否定的だということになる。

否定的な評価をした内容としては、「こんな人があると思うと恐ろしい」「馬鹿な親が増えていく」「理不尽な要求を突きつけ、先生や学校をたたくことが本当に子どものためになるのか」といった見方だけではなく、自分の身に置き換えて、「自分がモンスターペアレントの子どもだったら恥ずかしい」「母親にああなってほしくない」「自分の親がもしモンスターだったら学校に行きたくなる」といった声が多かった。

傾向としては、子どもは利己的な言動をする親を良しとしていないことが分かる。それが自分の親であれば尚更である。親の存在が影響し、自分が周りから変な目で見られることを恐れる意見もある。だが、こうした子どものニーズに反し、保護者の利己的な言動は増加の一途を辿っている。わが子のニーズを把握できないことも考えられるが、自分の言動が利己的だという認識や自覚が足りない可能性もある。だからこそ、利己的な言動を続けていくのだとは考えられないだろうか。

#### 4-3. 「自分がモンスターだと自覚しているか」

利己的な言動を繰り返す保護者を対象にして、「あなたは自分の言動が利己的だと気付いていますか」といった質問はとうてい出来ない。そこで、BBSの中から、「モンスターペアレントについての自覚」に関する声を拾ってみた。当然ながら、「自分は教師や学校に対して、利己的とも言える言動が多い」「自分はモンスターペアレントだ」と自己評価する声などないので、利己的な言動を繰り返す保護者を客観的に見た視聴者の声を集めることとした。

該当する指摘は21件であった。内容としては、「自分がそうとは気付かない」が20件、「客観的になってほしい」が1件であった。反対に「利己的な言動をする人は、その事実を自分で気付いているのではないか」と意見はなく、100%の割合で、利己的な言動を教師や学校にしている自覚がないということになる。

この数字は利己的な言動をしていると思われる保護者に対して、第三者の印象を集めたものに過ぎない。それでも、彼らが行為の重大性に対して、無自覚だという言葉でしか説明できないような、攻撃性や執拗性を発揮していることだけは確かであろう。

また、「自分も気付かないうちにモンスターペアレントになっているかも知れない」「モンスターペアレントの予備軍にいつ自分がなってもおかしくない」「誰しもがモンスターになりうる」など、無意識・無自覚のうちに利己的な言動をする保護者になることを懸念・心配する声も21件届いている。利己的だという自覚がなく発言・行動している周りの保護者を見ていての自分にあてた警鐘だと思われる。

#### 4-4. 「モンスター誕生の原因」

所謂「モンスターペアレント」が誕生した原因を指摘する声は、106件あった。視聴者の立場からいろいろと分析しているが、その原因を

社会全体・学校・家庭（保護者個人）に分けて見ていった場合、〈表3〉のように興味深い結果が出てきた。

〈表3:「モンスターペアレント」誕生の原因〉

各階層による原因の指摘	件
社会全体に原因があるという指摘	18
教師・学校に原因があるという指摘	8
家庭・保護者に原因があるという指摘	80

所謂「モンスターペアレント」と言われる、利己的な言動を繰り返す保護者が誕生した原因を指摘する声のうち、約75%（80/106）は保護者自身にその原因があるというのである。「溺愛して度を超してしまう」「子どものためではなく、自分の気を鎮めるため」「自己中心的」「人とのコミュニケーションを取れない」など、保護者のパーソナリティに起因すると指摘する比率が圧倒的である。

一方、保護者の利己的な言動の増加を、学校の責任にする声は極めて少ない。「仕事に対する教師の甘えがモンスターペアレントを増長させる」「学校に対する不信任」など、指摘としてあるにはあるが、微々たるものである。

ここから見えてくることとは、家庭や保護者に何らかの原因があり、利己的な言動が増えてきたという傾向である。もちろん、社会全体にも起因するものはあるだろう。だが、ここで重要なのは、学校や教師が何らかの変化をしたのではなく、あくまでも家庭や保護者、またはそ

の価値観を形成する社会全体に変化があった可能性があるということである。

## 5. 仮説の検証

臨床教育研究所「虹」の750の事例や関西テレビの公式BBSを分析することで、保護者の利己的な言動が増加したことに対する、次のような仮説を立てることが出来た。

- ①保護者の利己的な言動の増加の原因は、保護者自身または社会全体の変化に起因する。
- ②保護者から見て教師や学校に対する信頼感が低下してきたことに起因する。
- ③利己的な言動をする保護者が自分自身の身勝手さに気付いていないことに起因する。またその行為自体に気付かないのは、親自身の孤立に起因する。

上記の①から③の仮説が正しいのか、他のアンケートも見ていくことで検証していこう。

### 5-1. 保護者や社会の変化という仮説の検証

臨床教育研究所「虹」が行ったアンケート調査「モンスターペアレントの実態とその背景」において、「モンスターペアレントの原因は何だと思えますか」（教師や保護者など1247人が回答）という設問がある。原因として16種類が挙げられているが、それぞれの原因を社会全体、学校、家庭（保護者）に類別すると、〈表4〉<sup>(20)</sup>のような比率となる。（複数回答）

〈表4:モンスターペアレントの原因〉

【社会全体に起因するもの】		【学校に起因するもの】		【家庭や保護者に起因するもの】	
モンスターペアレントの原因	割合(%)	モンスターペアレントの原因	割合(%)	モンスターペアレントの原因	割合(%)
今日の社会風潮	34.5%	親とのコミュニケーション不足	18.6%	親のわが子中心主義	64.3%
ストレス社会の影響	16.8%	学校の権威の失墜	13.4%	自己中心的な親	61.4%
知識・情報化社会の進展	6.0%	学校の対応力不足	8.7%	親の孤立化	25.8%
学校外教育の充実	1.5%	学校の商品化	4.9%	親の権利意識が強い	17.0%
		学校の不誠実な対応	4.2%	学校依存型親の増加	16.0%
		問題教師の増加	3.6%	親の高学歴化	3.9%

ここでも、家庭や保護者に起因する項目に該当する割合が高く、続いて社会全体、学校という順序になっている。学校が変わったのではなく、保護者や社会全体の意識が変わったと見て良いだろう。

### 5-2. 教師や学校の信頼感の低下を検証

日本PTA全国協議会でのアンケートにおいて、保護者を対象に「ご家庭での教育（しつけ等）の悩みや不安について、現在はどうのようにして解決していますか。」という設問がある。それに対して「学校の先生に相談する」という回答が2004年は32.6%<sup>(21)</sup>もあったのに対して、2005年は23.8%<sup>(22)</sup>、2006年は23.5%<sup>(23)</sup>と、年々減ってきている。

東大大学院の「学力問題に関する全国調査」（小学校3084校、中学校1637校対象）でも、教師や学校に対する信頼感の低下が分かる結果が出ている。「20年前に比べて社会の学校に対する理解・支持はどうか」という設問に対して、「上がった・良くなった」という回答が8.0%、「変わらない」は22.5%であるのに対して、「下がった・悪くなった」という回答は69.6%<sup>(24)</sup>にも達していた。

ウェブ形式のアンケート調査でも、興味深いデータが出ている。2007年にマイボイスコム株式会社が実施した、「小・中学校の教育インターネットアンケート調査」（インターネットコミュニティ「MyVoice」の登録メンバー15765人対象）で、「自分の小中学校時代に問題だと思ったこと」「現在の小中学校で問題だと思うこと」を聞いている。「先生に敬意が払われていなかった」という回答が、前者では7.6%であったのに対し、後者では49.9%と約7倍に激増している。「学校の指導方針・姿勢」という回答に対しても、前者では5.5%であったのに対して、後者では27.4%<sup>(25)</sup>と約5倍の増加である。

保護者の教師や学校に対する尊敬の念や信頼

感が低下しているのは、紛れもない事実であろう。ただ教師力や学校の経営能力が低下したという客観的なデータがないので、教師や学校の実態にかかわらず、保護者の意識が一方向的に変化した可能性がある。

### 5-3. 利己的な言動に対する無自覚と親の孤立化を検証

日本PTA全国協議会の2007年のアンケート調査で、「授業参観などで、私語をしたり、携帯電話で撮影したり、態度が好ましくない保護者が多いとの声を聞くことがありますか、あなたはどのように感じていますか。」という設問があった。小学生の保護者（1832人）と中学生の保護者（2037人）に聞いた結果は、〈表5〉<sup>(26)</sup>の通りである。

〈表5:授業参観での保護者の態度アンケート〉

態度の好ましくない保護者の有無	小学生	中学生
特にそう感じている	15.8%	13.3%
ややそう感じている	42.5%	40.7%
さほどそう感じていない	33.5%	36.6%
ぜんぜんそう感じていない	7.3%	7.6%

授業参観等での保護者の態度について、小学生の保護者の58.3%、中学生の保護者の54.0%が好ましくないと感じている。半数の保護者がそう感じているにも関わらず、授業参観での私語や携帯電話での撮影があるということは、そうした行為自体、それほど悪いとは思っていない。つまりマナーに反することを自覚していないことが分かる。

またそうした行為はグループでされている場合もあり、ここでは個人が周りから孤立しているだけでなく、数人が常識や社会通念、または社会システムから孤立しているという見方も出来ると考える。

授業参観での保護者の態度を例に、小野田正利氏は次のように言っている。「昔から袖を引

くという言葉があります。服の一部を引っ張って、そっと注意するという意味ですが、この袖を引っ張る人と、引っ張られる人との間には、一定の顔見知りといった人間関係が必要です。見知らぬ人間からそれをされれば、当然、なんだ、お前は！ という感情が生まれますし、最初から注意を促す気持ちすら起きません。この関係性が希薄になってきているということなのだと思うのです。」<sup>(27)</sup>と。希薄な関係性では注意し合うことも稀であることは予想でき、保護者が好ましくない態度に自ら気付く機会など期待しようもない。

また、同協議会が2006年に行った「家庭での教育の悩みや不安の解決方法の調査」(小中学生の保護者2161人対象)では、〈表6〉<sup>(28)</sup>のような結果が出ている。(上位7項目を抜粋)

〈表6:家庭での教育の悩みや不安の解決方法〉

具体的な解決方法	割合
配偶者など家族に相談	69.7%
友人や知人に相談	59.3%
両親や年輩者などの経験者に相談	38.6%
学校の先生に相談	23.5%
自分だけで解決	12.8%
塾や習い事の先生などに相談	10.4%
育児番組を参考にする	10.2%

身近な人間に相談することが多いであろうから、最上位の理由である「配偶者などの家族に相談」は当然であろう。だが、続いて「知人や友人に相談」というのが多いが、所謂袖を引くような助言を受ける可能性は極めて低い。間違っても、自分で良しとしたことを誰かに諫められなければ、常識に対して無自覚になっていくとしても仕方のないことである。

農村部である秋田県では、健康福祉部子育て支援課において、2005年に「子育て環境と意識に関する調査」(未就学児、小学生、中学生、高校生の保護者4344人対象データ)を行っている。

子育てをとりまく社会について〈表7〉<sup>(29)</sup>のようなことが明らかになっている。

〈表7:子育てをとりまく社会についてどのように感じているか〉

	温かい見守りや手助けがある	子育てを応援する雰囲気感じない
非常にそう思う	8.4%	16.2%
まあそう思う	53.5%	42.1%
あまりそう思わない	32.6%	36.7%
全くそう思わない	4.1%	3.1%

農村部の秋田県でも、子育てで孤立している様子が見られる場合も多い。これが都市部となると、更に厳しい結果が出てくることは、容易に想像出来る。

一部の保護者が利己的な言動をしていることに対して、自ら自覚していないことはある程度分かった。またその無自覚さを助長する環境として、個としての孤立化だけではなく、時には集団として社会通念等から逸脱している、つまり孤立している様子も見て取れた。

## おわりに

“はじめに”でも指摘したが、多くの研究者たちが利己的な言動をする保護者の増加について、その背景を論じている。それが解決に結びつくための確かなものならば良いが、どうも話題性を重視しているとしか思えないようなものが多い。

例えば、「親たちが過ごしたバブル期の影響」や「格差社会、ストレス社会の進行」が原因だとする複数の研究者がいる。確かに、この2つの要因が無関係だとは言いきれない。だが、これを指摘する確証がどこにあるのだろうか。バブル期を過ごしたために、社会の先行きに不安を覚え、イライラした気持ちを教師や学校に向けたと言い切れるのだろうか。格差社会やストレス社会の責任を教師や学校に求め、相手を攻

撃することで心の安定を確保しているのではないかと言いきれるのだろうか。また、たとえこの2つが要因の一部だとしても、政治的な要素がからむ以上、教育学的見地からの解決は困難である。

「子どもに対する溺愛」を指摘する声もある。確かに、自分の子どもしか見えないような場合は、事態を冷静に受け止め対処することは難しいだろう。だが、わが子を溺愛したからといって、それが利己的な言動に結びつくだろうか。それは全く次元の違う話である。溺愛自体が悪いこととも言い切れない。

こうした研究においては、言い切れる部分だけを限定して指摘することが肝要である。でなければ、教育現場は疑心暗鬼に陥り、解決の糸口が見つかることを、殊更困難にしてしまう。

本研究において、ある程度確かに言い切れることとは、下記の3点である。

1つ目は、保護者の利己的な言動が増加した原因は、教師や学校そのものが変化をした訳ではなく、保護者自身が何らかの変化をしたということである。

2つ目は、保護者から見た教師や学校に対する信頼感が低下してきたことが原因だと考えられる。かつてのような尊敬の念をもってみられることは、今後は難しいかも知れない。

3つ目は、利己的な言動をする保護者が自分自身の身勝手さに気付いていないことが原因だと考えられる。親自身も孤立をしていて、なかなか正しい判断をする基準を持ちあわせていない面が見られる。

つまり、ここ数年で、「何らかの社会変動があり、保護者の学校に対する信頼感の低下や利己的な言動を特別なこととは思わない風潮を呼び起こすこととなった。その結果、個人でまた親しいグループでいても社会から孤立している保護者(たち)は、真っ先にその影響を受ける

こととなった。」とすることが出来るのではないかと考える。

多くの自治体が、保護者の利己的な言動に対応するプログラムとして、学校支援チームの組織、苦情対応マニュアルの作成、法律相談制度の実施を行っている。だが、果たして、それで良いのだろうか。現行の取り組みでは、事態の表面だけをとらえた、対処療法的な手だてしか見えてこない。このような手だてを取ることで、学校の信頼感を獲得し、保護者が自らの利己主義に気付き、孤立している状況から脱却するとは、とても思えないからである。自治体の取り組みが功を奏し、保護者の利己的な言動が激減したという報告も聞かない。

小野田正利氏が私に言った言葉を思い出す。「もう原因を特定する時期は終わりました。これからは具体的な解決方法に向かうことが大切でしょう。」<sup>(30)</sup>多くの研究者の意識はそうであろう。だが、ここで敢えて言わせていただきたい。

まずは、利己的な言動が増加した背景に対する認識を共有することが先決ではないのかと。そうでなければ的を得ない取り組みばかりが進み、学校と家庭とが手を携える学社融合の実現は遠のくばかりである。

#### 【引用文献・引用資料】

- (1) 向山洋一編集『教室 ツーウェイ』明治図書。2007年8月号。9頁
- (2) 山脇由貴子『モンスターペアレントの正体』中央法規。2008年。84頁
- (3) 諸富祥彦『モンスターペアレント!?』アスペクト。2008年。71頁
- (4) 小野田正利『学校現場における保護者対応の現状に関するアンケート調査』2005年。5頁
- (5) 金子元久『学力問題に関する全国調査』2006年。12頁
- (6) 鈴木尚子『教員勤務実態調査報告』Benesse。2006年。52頁

- (7) 日本PTA全国協議会『教育に関する保護者の意識調査報告書』2008年. 64頁
- (8) 小野田正利. 前掲資料. 6頁
- (9) 日本教職員組合『教職員の健康調査結果報告書』1975年
- (10) 日本教職員組合『教職員の健康調査結果報告書』1983年
- (11) 日本教職員組合『教職員のなやみ調査』1998年
- (12) 日本教職員組合『学級担任調査』1999年
- (13) 日本教職員組合『教職員の生活・勤務・健康実態に関するアンケート調査』2003年. 13頁
- (14) 横浜市教育文化研究所『教員の生活・勤務実態と社会的活動への参加状況調査』1996年. 5頁
- (15) 茨城大学教育学部小島研究室『教師の社会意識と教育意識に関する全国調査』2002年. 3頁
- (16) 尾木直樹『モンスターペアレントの実態とその背景』2008年. 1頁
- (17) 忠井俊明「極端なクレームをつけてくる親」『児童心理』NO.860 (2007年6月号). 89頁
- (18) 同書. 90頁
- (19) 忠井俊明氏から齋藤浩宛の書簡. 2008年8月29日付け
- (20) 尾木直樹. 前掲書. 6頁
- (21) 日本PTA全国協議会『学校教育改革についての保護者の意識調査報告書』2005年. 96頁
- (22) 日本PTA全国協議会『学校と家庭の教育に関する意識調査報告書』2006年. 103頁
- (23) 日本PTA全国協議会『教育に関する保護者の意識調査報告書』2007年. 88頁
- (24) 金子元久. 前掲書. 12頁
- (25) マイボイスコム株式会社『小・中学校の教育』2007年. 2,3頁
- (26) 日本PTA全国協議会『教育に関する保護者の意識調査報告書』2008年. 63頁
- (27) 小野田正利『親はモンスターじゃない!』学事出版 2008年. 168頁
- (28) 日本PTA全国協議会『教育に関する保護者の意識調査報告書』2007年. 88頁
- (29) 秋田県健康福祉部子育て支援課『子育て環境と意識に関する調査報告書』2006年. 20頁
- (30) 齋藤浩による小野田正利氏とのインタビュー 大阪大学人間科学部. 2008年8月27日

## 【参考文献】

- ・諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』中央公論 2005年
- ・小野田正利『悲鳴をあげる学校』旬報社. 2006年
- ・尾木直樹『教師格差』角川書店. 2007年
- ・諏訪哲二『学校のモンスター』中央公論. 2007年
- ・藤原智美『暴走老人!』文藝春秋. 2007年
- ・尾木直樹『バカ親って言うな!』角川書店. 2008年
- ・香山リカ『キレル大人はなぜ増えた』朝日新書 2008年
- ・多賀幹子『親たちの暴走』朝日新書. 2008年
- ・本間正人『モンスター・ペアレント』中経出版 2007年

